

第 16 回(2023 年度)JACET 関東支部大会 7 月版

●○● 大会テーマ ●○●

言語学習アドバイジング：その可能性を深く知る Language Learning Advising: A Profound Understanding of Its Potential

日 程	/ 2023 年 7 月 8 日 (土)	July 8th, 2023
Z o o m 開 設	/ 8 時 35 分より	Access starts at 8:35 a.m.
参 加 費	/ JACET 会員は無料 非会員は 2,000 円	Admission FREE for JACET member; 2,000 yen for non- member
事 前 申 込	/ 7 月 2 日 (日曜) まで	Last day to register: Sunday, July 2

E-mail: takane46@gmail.com (大会運営委員長 山口高領)
大会に関するお問い合わせはこちらへ。

●○● タイムテーブル ●○●

午前

9:00-9:30 (Main Room)	*実践報告 (Breakout 使用)「留学前準備としてのグループコーチングの可能性」 関戸冬彦・水沼早希 (白鷗大) 司会: 辻りこ (和洋女子大)
9:30-9:40 (Main Room)	賛助会員 LT (チエル株式会社)
9:40-10:10 (Room1)	研究発表「Trajectories of Learner Reflections During Team-based Collaborative Learning」 Akie Yasunaga (東京電機大) 司会: 渡辺彰子 (立命館大)
9:40-10:10 (Room2)	*実践報告「対面・オンラインによる言語学習相談の運営に関する実践報告」 木村雪乃・ワイルド玲奈・中村麗奈・西香生里 (獨協大)・渡邊一弘 (京都大) 司会: 田口悦男 (大東文化大)
10:10-10:20 (Main Room)	賛助会員 LT (コスモピア)
10:20-10:50 (Room1)	*実践報告「中学・高等学校教員養成課程外国語 (英語) コアカリキュラムに基づいた教職課程での学びの検証」 村岡有香 (聖学院大) 司会: 長田恵理 (國學院大)
10:20-10:50 (Room2)	*実践報告「理系大学生の国際学会発表準備ワークショップ開発—専門科目教員と英語教員の協働から— 河野円・福地健太郎・James Elwood (明治大) 司会: 大井洋子 (清泉女子大)
10:50-11:00 (Main Room)	賛助会員 LT (株式会社 mpi 松香フォニックス)
11:00-11:30 (Room1)	*研究発表「英語「論理・表現」授業への示唆—オックスフォード・ユニオンのディベート分析」 中谷安男 (法政大) 司会: 神村幸蔵 (筑波技術大)
11:00-11:30 (Room2)	研究発表「基礎教養英語リーディングクラスにおける教科書リストの導入: 学生へのアンケート調査とインタビューを通して」 志村美加・中竹真依子・小杉弥生・永田祥子・目黒沙也香 (学習院大) 司会: 西川恵 (東海大)

11:30-12:20 (Main Room)	招待講演「ChatGPTが英語教育にもたらすもの」水本篤（関西大） 司会：河内山晶子（明星大）
-------------------------	--

午後 (Main Room)

12:30-12:50	2023 年度第 1 回支部総会
12:50-13:00	賛助会員 LT (チエル株式会社)
13:00-14:00	* Keynote Speech “Advising in language learning: How reflective dialogue supports students” Jo Mynard (神田外語大) 司会：Yasuko Ito (神田外語大)
14:00-14:10	賛助会員 LT (コスモピア)
14:10-15:40	* Workshop “Practical advising approaches for facilitating reflection and promoting wellbeing” Satoko Kato (神田外語大) 司会：Yasuko Ito (神田外語大)
15:40-15:50	賛助会員 LT (株式会社 mpi 松香フォニックス)
15:50-16:20	* 実践報告「Effect of Interaction to develop 21st-century skills and cross-cultural sensitivity for Society 5.0」Hiroyuki Obari (青山学院大) 司会：浅利庸子 (早稲田大)
16:20-16:30	* 関東支部 バイリンガリズム研究会の紹介
16:30-17:30	* 関東支部 SLA 研究会発表「第二言語語用論を加味した英語教育の提案： 検定教科書への体系的導入に向けて」吉富朝子 (東京外国語大)
17:30	Closing

注：*は JACET 会員を対象に視聴申し込みをした方に、7 月末まで録画視聴ができるものです。

●○● ご案内 ●○●

大会はすべてオンライン（Zoom）で行われますが、青山学院大学青山キャンパスの以下の教室から参加することも可能です。来場希望者は、申込時にその旨を回答し、PCを持参して下さい。

青山学院大学青山キャンパス（〒150-8366 東京都渋谷区渋谷 4-4-25）

17号館4階、17404教室と17405教室

<https://www.aoyama.ac.jp/outline/campus/aoyama.html>

当日ご都合がつかないJACET会員を対象に、発表者の許可を得たものに限って録画視聴を可能にしました。視聴をご希望の方は、申込時にその旨を回答して下さい。視聴は7月末日までとします。視聴ご希望者には、大会終了後にGoogleの動画共有URLを発信者山口 takane46@gmail.comにてお送りします。

また、記録のためにすべての発表を録画する予定であることをご了解下さい。

参加（録画視聴）方法について

(1) JACET 非会員の方は、この機会に会員になることをご検討下さい。この支部大会の参加料が無料になるだけでなく、今年度のイベントの参加やジャーナル入手などの特典があります。入会情報は、

https://www.jacet.org/about_jacet/how_to_join_jacet/

(2) 本支部大会に参加希望の方は、以下の事前申し込みフォームに回答をお願い申し上げます。

<https://forms.gle/5jJvV4XgjoXy9ThV9>

回答終了後、回答のコピーに加えてお願い事項がメール送信されます。受信できない場合にはメールアドレスの入力誤りの可能性があります。修正がありましたら速やかにご修正下さい。

申込者には、会員であることや、非会員の方の入金が確認され次第、当日のZoom URLを前日までにメール送信します。

(3) 土曜の支部大会当日では、前日までに送信されるメールの中にあるZoom URLをクリックしてZoomにお入り下さい。そこをMain Roomとします。支部総会・基調講演・ワークショップなどはMain Roomで行います。Room 1や2が設置されている場合があります。各Roomに移動して発表を聴くこともできます。

以下は、大会を円滑に進めるためにご留意いただきたい事項です。

- (a) 参加なさる際には、ご自身のマイクをオフにしてください。
- (b) ご質問はチャット機能をご利用ください。発表中いつでも書き込むことができます。できるだけ皆様のご質問にお答えいただけるような進捗を努めますが、時間の制限によりできない場合もございますことをご了承ください。
- (c) ヘッドセットまたはイヤホンをご利用いただくとより良い音でご参加いただけます。
- (d) Zoom Web 会議の URL は公開しないでください。
- (e) 録画、録音等をしないでください。
- (f) Zoom にて表示されるお名前は、本名でアルファベット表記にしてください。

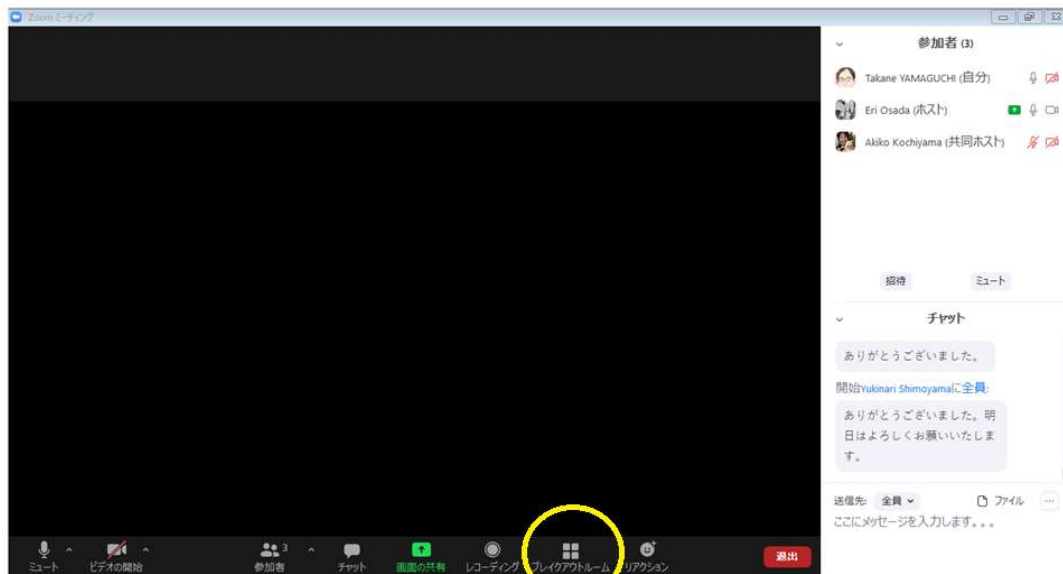
(参考) Zoom 会議中に表示される自分の名前変更をする方法

<https://symphonict.nesic.co.jp/workingstyle/zoom/change-name/>

(4) Room 1 や 2 に移動したり、Main Room に戻る方法

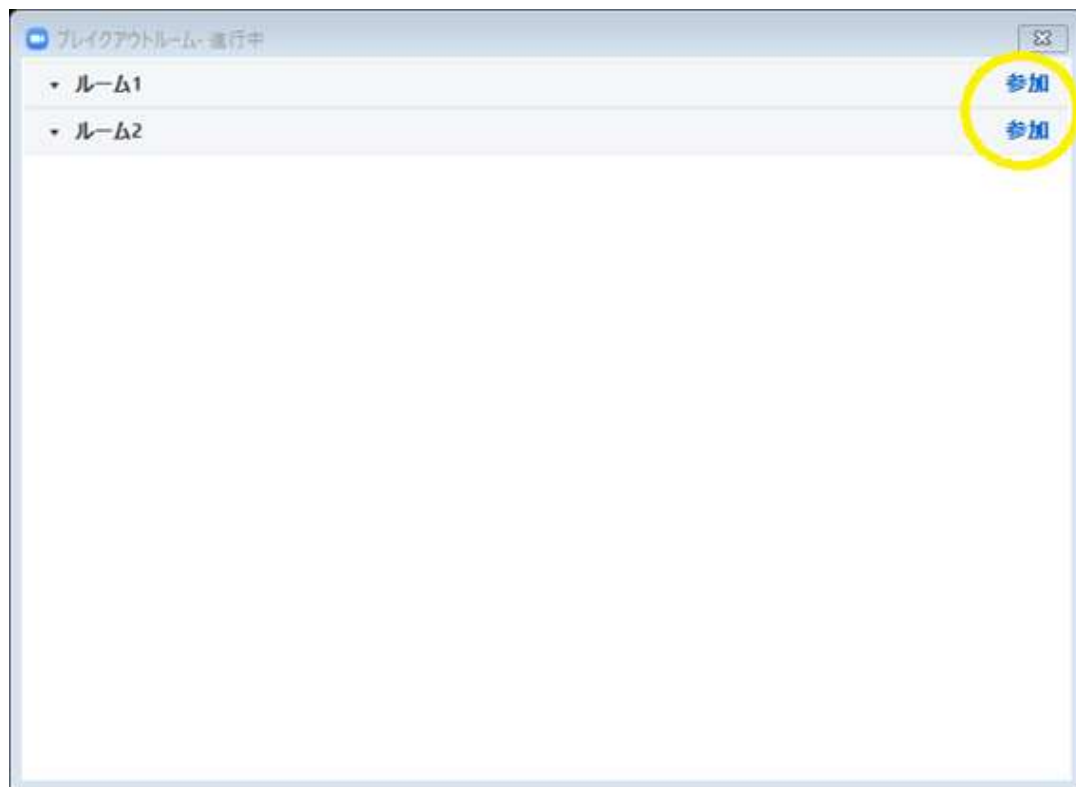
① 図 1 中の黄色の○で囲んだ部分にあるように「ブレイクアウトルーム」をクリック

図 1



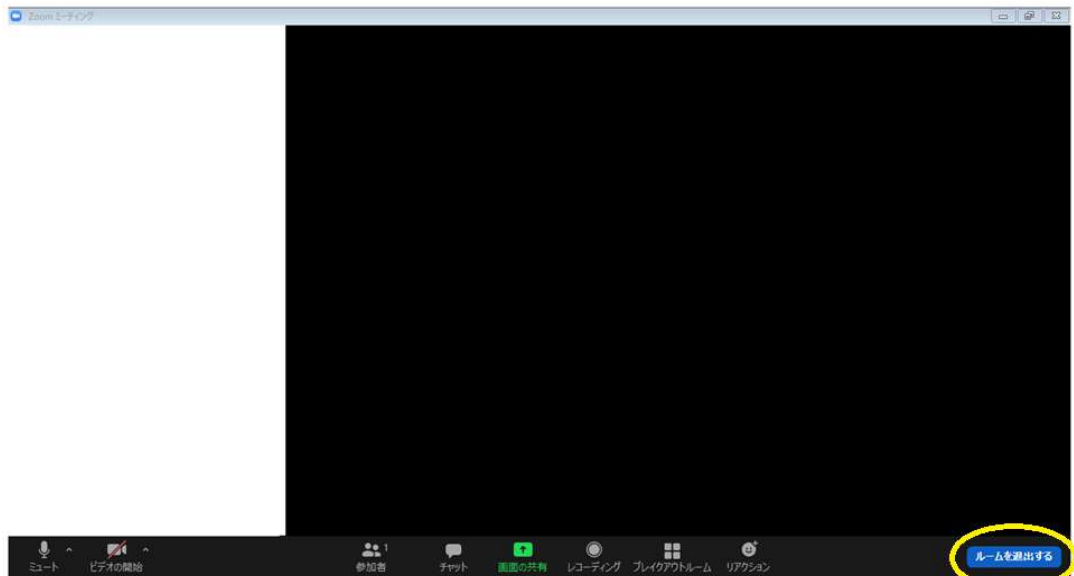
②図 2 中の黄色の○で囲んだ部分にある「参加」という文字をクリックして入室できます。入りたいルームと同一行の「参加」をクリックしてください。

図 2



③別のルームに移動を希望する場合は、まず、図 3 中の黄色の○で囲んだ部分にあるように、「ルームを退出する」という文字をクリックしてください。

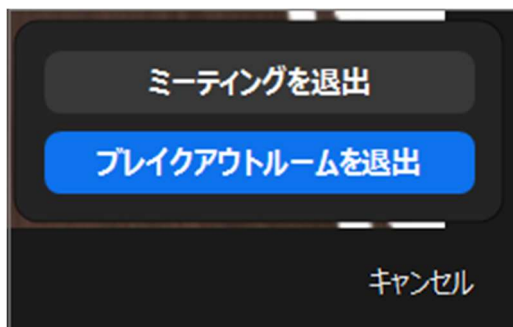
図 3



④「ルームを退出する」という文字をクリックすると、図 4 にあるように、「ミーティングを退出」と「ブレイクアウトルームを退出」を選択できます。「ブレイクアウトルームを退出」をクリックすると、**Main Room** に戻りますが、「ミーティングを退出」という文字をクリックすると、**Zoom** を終了することになります。

図 4(<https://zoom-support.nissho->

[ele.co.jp/hc/ja/articles/360022809332-%E3%83%96%E3%83%AC%E3%82%A4%E3%82%AF%E3%82%A2%E3%82%A6%E3%83%88%E3%83%AB%E3%83%BC%E3%83%A0%E3%81%B8%E3%81%AE%E5%8F%82%E5%8A%A0](https://zoom-support.nissho-ele.co.jp/hc/ja/articles/360022809332-%E3%83%96%E3%83%AC%E3%82%A4%E3%82%AF%E3%82%A2%E3%82%A6%E3%83%88%E3%83%AB%E3%83%BC%E3%83%A0%E3%81%B8%E3%81%AE%E5%8F%82%E5%8A%A0))



●○○● 目次 ●○○●

ご挨拶

JACET 会長 小田眞幸 (玉川大学)	1
----------------------------	---

ご挨拶

JACET 関東支部支部長 山口高領 (秀明大学)	2
---------------------------------	---

*実践報告 (Breakout 利用) 「留学前準備としてのグループコーチングの可能性」

関戸 冬彦 (白鷗大学)・水沼 早希 (白鷗大学)	3
---------------------------------	---

研究発表 「Learner Reflections on Team-based Collaborative Learning」

Akie Yasunaga (Tokyo Denki University)	5
--	---

*実践報告 「対面・オンラインによる言語学習相談の運営に関する実践報告」

木村 雪乃 (獨協大学)・ワイルド 玲奈 (獨協大学)・中村 麗奈 (獨協大学)・西 香生里 (獨協大学) ・渡邊 一弘 (京都大学)	7
--	---

*実践報告 「中学・高等学校教員養成課程外国語 (英語) コアカリキュラムに基づいた教職課程での 学びの検証」

村岡 有香 (聖学院大学)	9
---------------------	---

*実践報告 「理系大学生の国際学会発表準備ワークショップ開発

—専門科目教員と英語教員の協働から—

河野 円 (明治大学)・福地 健太郎 (明治大学)・James Elwood (明治大学)	11
---	----

*実践報告 「英語「論理・表現」授業への示唆—オックスフォード・ユニオンのディベート分析」

中谷 安男 (法政大学)	13
--------------------	----

研究発表 「基礎教養英語リーディングクラスにおける教科書リストの導入:学生へのアンケート調査 とインタビューを通して」

志村美加 (学習院大学)・中竹 真依子 (学習院大学)・小杉 弥生 (学習院大学)・永田 祥子 (学習院 大学)・目黒 沙也香 (学習院大学)	15
--	----

*招待講演「ChatGPTが英語教育にもたらすもの」	
水本 篤（関西大学）	17
* Keynote Speech “Advising in language learning: How reflective dialogue supports students”	
Jo Mynard (Kanda University of International Studies)	18
* Workshop “Practical advising approaches for facilitating reflection and promoting wellbeing”	
Satoko Kato (Kanda University of International Studies)	20
*実践報告 “Effect of Interaction to develop 21st-century skills and cross-cultural sensitivity for Society 5.0”	
Hiroyuki Obari (Aoyama Gakuin University, Emeritus)	22
* 関東支部 SLA 研究会発表「第二言語語用論を加味した英語教育の提案：検定教科書への体系的導入に向けて」	
吉富 朝子（東京外国語大学）	24
* 発表査読者	26
* 賛助会員 LT	26
* 支部大会運営組織	26
* Call for Papers: JACET-KANTO Journal Vol. 11	27

THE 16th ANNUAL CONVENTION OF JACET KANTO CHAPTER
大学英語教育学会（JACET）関東支部会員各位

大学英語教育学会会長
小田眞幸（玉川大学）

ご挨拶

日頃の学会活動にご参加いただきましてありがとうございます。

この度は第16回（2023年度）JACET 関東支部大会が2023年7月8日（土）に開催されますことを心よりお祝い申し上げます。今年度は大学では対面授業がほぼ全面的に再開され、キャンパスに活気が戻りつつあります。またコロナ禍の3年間で蓄積した「財産」を活用したオンライン授業等の取り組みも継続されています。

今年度の関東支部大会は「言語学習アドバイジング：その可能性を深く知る (Language Learning Advising: A Profound Understanding of its Potential)」というテーマで、英語学習の「伴走者」として私たち英語教育関係者がどのような走って行くべきかを皆さんと一緒に考えて行きたいと思えます。今年度のプログラムは神田外国語大学のJo Mynard先生による基調講演“Advising in language learning: How reflective dialogue supports students”のほか、関西大学の水本篤先生による招待講演「ChatGPTが英語教育にもたらすもの」をはじめ、Workshop、実践報告、さらに様々な研究発表と盛りだくさんのプログラムが組まれています。

今年度の支部大会もオンラインで開催いたします。ご存じの通り関東支部におかれましては他支部に先駆けて2020年8月の第13回支部大会を完全にオンラインで開催するという画期的な試みを行い、これまでは支部会員が中心であった参加者が全国、あるいは海外まで広がるという新たなスタイルを作りました。今年度も前年度に引き続き全国からの参加者、発表者をお迎えし活発な議論が行われることを期待します。

本大会の発表者、参加者、賛助会員の皆様、そして企画運営に関わった関東支部の委員の皆様には深く感謝いたします。学会としても支部大会を通して大学英語教育にさらなる貢献ができればと思います。関東支部大会のご成功をお祈りいたします。

THE 16th ANNUAL CONVENTION OF JACET KANTO CHAPTER

本大会にご参加のみなさま

大学英語教育学会関東支部支部長
第16回 JACET 関東支部大会委員長
山口高領（秀明大学）

ご挨拶

昨年度に続き、Zoom を使ったオンラインでの開催でございます。オンラインの大会ならではのでしょうか、海外からのご講演もございまして、参加者のみなさまもお好きな場所から参加可能です。

本大会では、大会テーマを「言語学習アドバイジング：その可能性を深く知る」と設定しました。この大会テーマに沿って、基調講演は、Jo Mynard 先生（神田外語大学）に「Advising in language learning: How reflective dialogue supports students」を、ワークショップは、加藤聡子先生（神田外語大学）に「Practical advising approaches for facilitating reflection and promoting wellbeing」をお願いすることができました。

また、会員のみなさまとなるべく新しい情報を共有するために、水本篤先生（関西大学）に、「ChatGPT が英語教育にもたらすもの」という招待講演を行っていただけることにもなりました。

さらに、従来のように、研究発表・実践報告の他、SIG 紹介・発表もございまして。賛助会員によるライトニングトーク（LT）も予定しています。

今回も申込者に Zoom URL を1つお知らせします。Zoom に入った場所を Main Room とし、ご希望に応じて、Room 1 と Room 2 に入るという体制にしました。ご興味に応じて Room 1 と Room 2 にて参加内容を選べます。

今回も、佐竹由帆先生（青山学院大学）にご協力いただき、当日には青山学院大学の教室から参加することが可能です。対面での情報交換などにご活用ください。

また、今回も、JACET 会員に限り、申込者に当日の録画を視聴できる体制を作りました。多くの録画を7月末日までご覧になれます。同時間帯で行われる発表を視聴したいというご希望をなるべく叶えるように致しました。なお、記録のためにすべての発表について録画されることをご理解の上でご参加下さい。

今回の発表審査には、12名の先生にご協力頂きました。Paul McBride 先生（玉川大学）、伊藤泰子先生（神田外語大学）、長田恵理先生（國學院大學）、河内山晶子先生（明星大学）、小屋多恵子先生（法政大学）、下山幸成先生（東洋学園大学）、鈴木健太郎先生（北海道教育大学）、中山夏恵先生（文教大学）、西川恵先生（東海大学）、馬場千秋先生（帝京科学大学）、藤枝豊先生（共愛学園前橋国際大学）、藤尾美佐先生（東洋大学）、各先生にお礼を申し上げます。

また、大会運営に当たりまして、多くの先生方にご協力頂きました。副支部長の長田恵理先生（國學院大學）、会員のみなさまへの連絡のお手伝いをしてくださった、事務局幹事の佐竹由帆先生（青山学院大学）、新井巧磨先生（早稲田大学）、鈴木健太郎先生（北海道教育大学）、Host や Co-host の役割も積極的に引き受けていただきました運営委員の先生方にも、改めましてお礼申し上げます。

どうぞ今後とも、JACET および関東支部の益々の発展に向けてご尽力いただけますよう、よろしくお願ひ申し上げます。

留学前準備としてのグループコーチングの可能性

Possibilities of Group Coaching as Pre-Studies for Study Abroad

関戸 冬彦（白鷗大学）・水沼 早希（白鷗大学国際交流サポートセンター）

はじめに

3年ほど続いた新型コロナウイルス蔓延に起因する世界規模での様々な影響も徐々に落ち着きつつある。それに伴って厳しい規制が敷かれていた海外への渡航も緩和され始め、従来の留学関連事業の再開に向けて動き出している大学も多いことだろう。本学もその例外ではなく、夏以降に渡航し海外での留学を開始する学生たちを支援し始めている。そんな中で、改めて留学するための準備として何をすべきかを考えた際に、トップダウンで一律的に何かを決めてさせるより、学生個々の興味、関心に応じた自律的な準備ないし学習を導入できはしないだろうか。そんな視点に立った際に、グループコーチングという形態がそのひとつの可能性になりうるという仮説の下に実践し、またその内容の報告することが今回の主旨である。

1 グループコーチングとは何か

コーチングとはすでに幾多の先行研究で明らかにされているように、端的に言えば相手の行きたい場所、地点へと導くことを指す。ティーチングが何かを「教え込む」ことであるならば、コーチングはすでに持っているものを「引き出す」行為である。つまり、コーチとは相手の可能性を引き出す存在であり、学習に関していうと相手より知識があるとか成績が優秀であるとかの優劣ある存在ではないし、むしろそれはあまり関係がなく、あくまで相手の願望を叶えるための応援者である。よってグループコーチングとはグループ内で参加者それぞれがお互いにコーチ的な役割を果たし、互いの取り組みを応援し合う、あるいは存在そのものを肯定することを指す。無論、プロないしエグゼクティブコーチともなると相当なハードルがあるが、グループコーチングの場合はフレームさえ出来てしまえばそれほど難なくできるという利点もある。今回の実践は上記の定義に則った上で、留学することがすでに決定している者たちが実際に留学するまでに準備とし

THE 16th ANNUAL CONVENTION OF JACET KANTO CHAPTER

て何をすべきか、何をしたいか、に関してお互い刺激を受け、励まし合う場を設けた、というものである。

2 実施方法と参加者の反応

では実際の実施方法であるが、実施（開始）時が2022年度末の春休み（2023年2～3月）だったこともあり、参加者個々にいろいろ予定もあるだろうということで、週に1回（木曜日朝9時スタート）で1時間弱の頻度でオンラインにて行うことにした。この場合のオンラインとはテレビ会議システムZoomを使用したオンライン上での対話を指す。留学予定者は5名、進行役としてファシリテーター1名（水沼が担当）が付き、オブザーバーとして関戸も参加していたので合計6名が参加メンバーとなった。対話の内容に関しては、今回は留学前準備が主たる目的であるので、先に述べたようにそれぞれが留学するまでに何をしたらよいのかを考えて実践し、それを専用シートに記入した上で対話に臨む。専用シートはTeams上でメンバーのみが閲覧できる場にあり、ひとりずつのパワーポイントスライドとなっている。ここに1週間の自分の準備と行動、あるいはそれに伴う気づきなどを記入し発表することになっている。発表後は聞いていたほかのメンバーがコメントをし、順番に全員が行う。この場で心がけていることは、基本的にそれぞれの取り組みを尊重し、なるべく出来ているところに目を向けるということだ。最初のうちはとかく出来ていないところにばかり目がいき、ひたすら反省の弁を述べるといった状態になってしまうこともあるが、メンバーから「ここはいいね」「これは自分もやってみたい」のようなコメントをもらううちに自然と全員が誰かと比べるわけではなく、よりよい自分の取り組みは何だろうかと考えるようになっていった。こうしたプロセスや変化は、当日個別の事例として具体的な取り組み含め紹介し、参加者からのコメントやアンケート結果などの分析結果にも触れる予定である。

3 今後の可能性について

今回の実践は留学前準備に関する実践だったので、こうして行った準備が実際に留学してみて功を奏したのかどうかは今後改めて別途検証する余地がある。今回の参加者たちは今年の秋、つまり2023年度秋、から半年ないし1年間留学するので、留学中、そして留学後にどのような変化があったのか否か、そうした面も含めて引き続き追いかけることで留学プログラムそのものの在り方含め、今後のさらなる可能性についても検討したい。

Learner Reflections on Team-based Collaborative Learning

Akie Yasunaga (Tokyo Denki University)

Team-based learning (TBL) is new in foreign language teaching. Developed by Michaelsen in the 1980s, TBL is an educational strategy that takes advantage of collaborative activities within a small group, which serve as a cornerstone of active learning (Michaelsen, 2004). TBL is currently widely adopted in educational settings in over 100 academic disciplines and on over 200 campuses in the US and eight foreign countries, (<http://www.teambasedlearning.org/talk-to-the-experts/larry-michaelsen/>).

Cooperative learning (CL) is another active learning strategy that makes use of learner resources to enhance the learning experience the teacher designs and structures, which include think-pair shares and round-robin activities done for a short period of time. Compared to CL, TBL calls for a collective endeavor of the team members to realize their learning, creating shared enterprise over the course of learning. TBL works effectively if the course contains a significant body of information and ideas, i.e., the content that students need to understand; and the goal of the course focuses on having students able to apply the content knowledge, typically by solving problems through discussion (Fink, 2004). In Japan, some medical science courses adopt TBL strategies and abundant resources for classroom practices are available online.

TBL follows a systematic instructional sequence composed of three phases: 1) the readiness assurance phase through flipped learning; 2) the application phase to build a solid foundation of knowledge through collectively working together; and 3) the assessment phase to synthesize and demonstrate their learning. Each collaborative learning process entails intra- and inter-team discussions to help build collective knowledge, team cohesiveness, and learner autonomy.

This presentation uncovers how TBL can be applied in general English courses in tertiary education in Japan. During the COVID-19 pandemic, I had to teach English classes in a hybrid form, connecting the in-class face-to-face students (half of the total) and the online participating students at home (half of the total) on the Zoom platform, and I adopted TBL to ensure students' active participation under the online learning situation. The courses were thematically woven content-based courses, teaching vocabulary, forms, and logical thinking

THE 16th ANNUAL CONVENTION OF JACET KANTO CHAPTER

skills through learning thematic units. Over the course, the students engaged one-fourth of the class time in collaborative TBL discussions to generate their answers on the Zoom platform. The TBL three instructional steps were conducted as follows:

1. *RAP (Readiness Assurance Process):*

The students completed learning basic concepts before the class by reading and watching pre-recorded lecture videos. They took a test to check their understanding.

2. *The application phase:*

I taught materials while interacting with the students on Zoom, and they engaged in collaborative TBL activities to apply their learned concepts to a new context through discussion. They worked on more difficult concepts than in the previous phase.

3. *The assessment phase:*

The students worked on their culminating project, synthesizing previously learned knowledge, and for the latter half of the courses, they worked collaboratively to produce their projects. They presented in the class at the end of the course.

I collected the students' reflections on TBL and grouped them into common themes. The analysis found that TBL brought about positive psychological changes over the course of progressive TBL activities. The sequence of psychological change can be categorized as follows: 1) the initiating stage, having a collaborative mindset; 2) the progressing stage, accruing subject knowledge through co-teaching and learning; 3) polishing team collaborative skills, direction maintenance; and finally, 4) the culminating stage, reflecting on their achievement. Through these findings, though TBL is more in use in STEM courses, language teachers can effectively apply TBL in general English courses.

References

- Fink, L. D. (2004). Beyond small groups: Harnessing the extraordinary power of learning teams. In L. K. Michaelsen, A. B. Knight, & L. D. Fink (Eds.), *Team-based learning: A transformative use of small groups in college teaching* (pp. 3-26). Stylus Publishing.
- Michaelsen, L. K. (2004). Getting started with team-based learning. In L. K. Michaelsen, A. B. Knight, & L. D. Fink (Eds.), *Team-based learning: A transformative use of small groups in college teaching* (pp. 27-50). Stylus Publishing.

対面・オンラインによる言語学習相談の運営に関する実践報告 Management of Face-to-Face and Online Language Learning Advising

木村 雪乃（獨協大学）

ワイルド 玲奈（獨協大学）

中村 麗奈（獨協大学）

西 香生里（獨協大学）

渡邊 一弘（京都大学）

1. はじめに

獨協大学「英語学習サポートルーム（English Learning Support Room）」は、英語を専攻としない 3 学部 8 学科の学生が入学から卒業まで自律的に英語学習を継続できるようになることを目的として、2010 年から対面式の英語学習相談を行ってきた。しかし、新型コロナウイルスの流行が始まった 2020 年度は、対面相談を実施することが困難となった。コロナ禍でも学生の自律学習を支えていくために、英語学習サポートルームでは、まず書き込み式のオンライン学習相談を開始した。その後、新型コロナウイルスの感染拡大状況や大学での対面授業の再開などに応じて、以下の通りアドバイジングの形式を柔軟に変更してきた。

2020 年 5 月～	書き込み式相談
2020 年 10 月～	Zoom 相談
2022 年 6 月～	対面相談／Zoom 相談

本発表では、2020 年度から現在まで実施してきた学習相談について、それぞれの学習相談の形式の特徴、課題とその解決策等について、学習相談の運営を行うコーディネータと実際に相談を行うアドバイザーの視点から振り返る。

2. 実践報告

2.1 書き込み式相談

コロナ禍で学生が大学へ入構禁止になり、Zoom もまだ全学的に普及していなか

THE 16th ANNUAL CONVENTION OF JACET KANTO CHAPTER

った頃、英語学習サポートルームでは書き込み式のオンライン学習相談を始めた。学生は本学で導入している LMS にログインして、学生本人とアドバイザーのみが閲覧可能なページ上に相談内容を書きこみ、アドバイザーが指定の業務時間内に返信をした。この相談形式は、学生が予約不要でいつでも相談ができること、対面で話をするのが苦手な学生でも気軽に相談できること、などの利点があった。一方で、リアルタイムでの相談ではないため双方向のコミュニケーションになりにくいこと、継続して利用する学生が少ないことなどが課題であった。

2.2 Zoom 相談

2020 年度春学期に Zoom を使用したリアルタイムでの授業がある程度普及し、学生・教員がともに Zoom の使用に慣れてきたことから、2020 年度秋学期から事前予約制による 1 セッション 20 分間の Zoom 学習相談を開始した。この相談形式では、学生の相談に対してリアルタイムでアドバイザーが回答でき、学生もオンライン授業の合間に自宅等から相談を受けることが可能であった。書き込み式相談も並行して実施した期間もあり、学生が自分のスケジュールに合わせて利用しやすいように工夫した。一方で、学生の継続利用を促しにくいという点では課題が残った。

2.3 対面相談／Zoom 相談

2022 年度春学期から、対面授業を再開する講義が増え、キャンパスにも学生の数が増えてきたため、学期の途中から対面式の学習相談も再開し、学生が対面または Zoom での相談を選択できるようにした。学生が都合に応じて相談方法を選択できるため、利便性がより高まった。また、対面相談を終えた学生には、英語学習サポートルームに常駐するスタッフが次回の利用予約を直接促すことができ、結果として一人当たりの利用回数の増加にもつながった。さらに、2019 年度以前に行っていた学習相談のピアレビューも再開し、アドバイザーが自身の学習相談について自己評価を行うことができた。

3. 結論

2020 年度から現在まで、社会情勢や大学の方針に応じて学習相談の形式をその都度変えてきたが、どの形式でも、学生の自律学習を促すという目的は一貫しており、学生の目標設定や計画、自己調整学習のサポートに役立っていた。当日の発表では、相談件数の推移、アドバイザーの振り返り、利用学生の感想も含めて、これまでの実践と成果についてより詳しく報告する。

中学・高等学校教員養成課程外国語（英語）コアカリキュラム
に基づいた教職課程での学びの検証

**Exploration of Learning in Teacher-Training Course Based on
the Core Curriculum for Teaching English as a Foreign Language
in Junior High and High Schools**

村岡 有香（聖学院大学）

2019年度より中学・高等学校教員養成課程外国語（英語）コアカリキュラムに沿った教職課程での学びが施行されている。本研究の目的は、2019年度に入学し、コアカリキュラムに基づき編成された教職課程科目を履修した本学の学生が、学内・学外の学びを通して、どの程度コアカリキュラムの内容を理解できたかを検証し、今後、知識や技能を更に深めるためにどのような改善ができるか考察することである。2019年から2022年度の4年間のうち、3年間はCOVID-19の影響を受け、オンラインでの授業受講が多かった学年である（2020年度は1年間すべての授業がオンラインであった）。従って、理解が低い項目がある場合、オンライン授業の影響も仮定できる。

オンラインによるアンケート調査は、教育実習が終わった後の2022年7月に実施し、10名から回答を得た。アンケートでは、「英語科の指導法」に関する質問23項目、「英語科に関する専門的事項」14項目（全37項目）に対して、「とてもそう思う」から「全くそう思わない」までの5つのリカート・スケールを使用して回答してもらった。集計結果は、数値化したのち、全項目の平均値を算出した。

「英語科の指導法」と「英語科に関する専門的事項」の全体の平均値を比べると、前者の方が僅かに高かった（3.54 vs. 3.19）。また、37項目の内、平均点上位（4.0～3.8）6つすべての項目は「英語科の指導法」に属し、下位（2.5～3.0）5つの項目の内3つは「英語科に関する専門的事項（英語文学）」であった。

「英語科の指導法」と「英語科に関する専門的事項」の平均点の差は僅かであるにもかかわらず、平均点上位の項目全てが「英語科の指導法」に属していることから、この領域に対する理解度は比較的高かったことが示唆された。一方「英語科に関する専門的事項」の理解については、全体的に平均値が低く、平均点下位項目も多く含まれていたため、理解度が相対的に低かったことが推測できる。

THE 16th ANNUAL CONVENTION OF JACET KANTO CHAPTER

「英語科の指導法」の理解度が比較的高かった理由として、「教育実習」など「他の教職科目」との連携が考えられる。教育実習において、授業内で学んだ指導法に関する理論的な知識を活用することで、理論と実践的な経験が相互に補完され、理解度が高まった可能性がある。

一方、平均点下位の5つの項目のうち、3つが「英語科に関する専門的事項（英語文学）」に属していることから、英語文学に関する理解度が特に低かったことが示唆された。英語文学に関する項目の平均点の低さは、粕谷（2021年）による研究結果の中でも報告されている。

また、アンケート平均点上位6つの項目の内、3つ（「学習指導案の作成」、「観点別学習状況の評価、評価規準の設定、評定への総括」、「第二言語習得に関する知識とその活用」）については、オリジナルの「学習指導案作成のための教本」を活用した指導が行われ、回答結果と整合性があったことから、教本の使用には一定の効果があったと推察できる。

教本では、まず「第二言語習得の原理」を解説し、典型的な授業展開の例を提示した。模擬授業の前に、教員が教本に基づいて典型的な授業を行い、学生たちに「授業体験」をしてもらった。次に、学習指導要領の内容と照らし合わせながら、模擬授業で使用する教科書の中から単元を一つ選んでもらい、その単元の学習目標、話題、題材、言語材料、言語活動、言語の働きを分析し、「教材研究レポート」を作成してもらった。この「教材研究レポート」の内容を基に、どのように50分授業の中で指導するか、また5つの領域・3つの観点からどのように学習評価を行うかについて考えてもらった。最後に学習指導案の例を参考にして、「ひな型」を使用しながら指導案の作成に取り組んだ。

本アンケート調査を通して、コアカリキュラムで示された学習項目の理解度に、違いがあることが分かった。「英語科に関する専門的事項」よりも「英語科の指導法」に関する理解度の方が比較的高かった。「英語科に関する専門的事項」では、英語文学に関する項目の平均点が特に低かった。また、独自の教本を用いた上述した指導方法は、第二言語習得に関する知識、観点別評価の手法、評価規準の設定方法、学習指導案の作成方法についての学びを促進したことも示唆された。

粕谷（2021年）が提案しているように、コアカリキュラムに対応した「具体的・包括的なプログラム」の充実に向けて、指導内容の連携と有機的結びつきが重要となる。今後、本学の教職課程においてどのような点を改善すべきかを詳細に検討し、改善プランを策定することが、次の研究課題となるだろう。

理系大学生の国際学会発表準備ワークショップ開発
—専門科目教員と英語教員の協働から—

Workshops to Prepare Science Majors for International Conference Presentations: Designed by Discipline Faculty and English Faculty

河野 円（明治大学）

福地 健太郎（明治大学）

James Elwood（明治大学）

はじめに

理系大学生が国際学会にて英語で研究発表を行う際には、どのような準備が必要だろうか。本研究において筆者らは、学生が国際学会にて英語で口頭発表する際の支援プログラム開発を目指して、専門科目教員と英語教員協働のもとに、準備ワークショップを設計した。2022 年度に情報科学分野の国際学会で発表が決定している学部学生と大学院学生を対象に行った実践を報告し、その効果を検証する。

参加者

関東圏の私立大学理系学部にて試行されたワークショップの企画にあたったのは、英語教員 2 名と専門科目教員 1 名、合計 3 名である。この 3 名がカリキュラム構築と教材作成、記録を協働して行った。学生参加者は以下の 6 名であり、全員、国際学会での発表は初めてであった（表 1）。

表 1
ワークショップ参加者プロフィール

Group	参加者	学年	発表形態	学会	CEFR
1	S1	4	対面	学会 A（カナダ）	A2
	S2	4	対面		B1
	S3	4	対面		B1
2	S4	4	対面	学会 B（イタリア）	A2
	S5	M2	オンライン		不明
3	S6	M2	オンライン	学会 C（カナダ）	A2

THE 16th ANNUAL CONVENTION OF JACET KANTO CHAPTER

ワークショップ内容

グループごとに約 3 時間のワークショップを行った。参加者が各自で準備したスライドとスクリプトをもとに発表練習を行い、英語教員と、専門科目教員それぞれの立場から、フィードバックを行った。用語や図表について質問したり、英語として不自然な表現や意味の曖昧な部分を指摘したり、発音や間の取り方にも言及した。ワークショップ後半では主に座長や質問者との口頭でのやり取りを想定した演習を行った。学会での定型表現を示し、質疑応答のシミュレーションも取り入れた。これらを複数のカメラで録画し、参加者自身による復習用に提供した。

発表後インタビュー

各国際学会の終了後、1 週間から 10 日後に参加者ごとに一人ずつ Zoom を利用して約 30 分の半構造化インタビューを行い、口頭発表を振り返りながらワークショップの効果や今後の課題等について日本語で述べてもらった。その後、録画を書き起こし、KH Coder 及び NVivo 1.7.1 を用いて質的分析を行った。KH Coder では、最頻出語の抽出やアイディアの共起ネットワークを調べた。また、NVivo を用いた分析では、参加者の発言をコーディングし、コードとケースを精査した。

結果

ワークショップは、Group1 に対しては初めての試みということもあり時間配分に苦慮したが Group2 からは円滑にすすんだ。発表後インタビューの分析からは、語句の正確な使い方やスライド中の図表の明確化、口頭表現におけるデリバリー（抑揚、アイコンタクト）改善などの点で効果があったことが示唆された。一方で質疑応答やトラブル対応などの場面では、本番で苦労した旨が報告された。学会会場でのコミュニケーション活動を想定した演習を、更に充実させることが今後の課題である。

まとめ

準備から実践に至る専門科目教員と英語教員の協働は、学生の国際学会発表の支援ワークショップ実践に有効であった。今回の試行で明らかとなった課題を修復し、汎用性のある英語発表準備サポート体制の完成に繋げたい。

謝辞

科研費基盤(C) 20K0081 の助成を受けている。

英語「論理・表現」授業への示唆—オックスフォード・ユニオンの ディベート分析

How to Organize Logic and Expression Lessons in English: An Analysis of Oxford Union Debates

中谷 安男（法政大学）

要旨

高校の現場では、「英語表現」に代わり、「論理・表現」の授業が始まっている。この科目は、英語によるスピーチやプレゼンテーション、ディスカッション、ディベートなどを通じて英語のアウトプットの強化を目指す。しかし英語ディベートに関しては、具体的にどのような指導を行えばよいのか、あまり明確になっていない。本発表では、1825年に設立された世界最大の学生組織オックスフォード・ユニオン（Oxford Union：OU）のトレーニング方法に注目し、どのような学習方法が効果的なのか考察を行う。また、学期中に行われる公式フォーマル・ディベートにおける実際のスピーチをスク립ト化したコーパスデータを作成し分析した結果を基に、ディベートの発話の特徴を検証する。

1 英国パーラメント形式のディベート

米国大統領選挙の候補者の討議をはじめ、ディベートには様々な形式がある。本論では、特に英国議会で行われるパーラメント形式のディベートに関連し考察を行う。この形態は、旧英国植民地で構成されるコモンウェルス 54 カ国において、学生のリーダーシップ教育の一環として積極的に導入されている。毎年これらの国々を中心に世界最大規模の大学生ディベート選手権が開催されている（中谷，2022）。

この形式は 2 人ずつがペアとなり、ディベートの動議（motion）に対して賛成 2 ペアの 4 人、反対 2 ペアの 4 人ずつの合計 8 人が参加する。ディベートの直前に動議が発表され、賛成、または反対の立場に振り分けられる。そして 15 分の準備時間が与えられ、賛成派、反対派が交互にスピーチを行う。直前まで討議内容は分からないので、その場で関連情報を集める余裕はない。このため各スピーカーは豊富な事前知識を十分に身につけておく必要がある。また、相手側の主張を反駁する必要があり、逆の立場のスピーチ内容をより正確に聞き取り、その論旨を崩すために高度な聴解力とクリティカルな思考が必要となる。

THE 16th ANNUAL CONVENTION OF JACET KANTO CHAPTER

さらに、賛成派・反対派のディベートの優劣は、聴衆がジャッジとなり判断する。そのために、自分の論旨や主張を客観的に組み立て、第三者が納得するようにスピーチを行う必要がある。以上のように、ディベートの向上のためには、豊富な知識に裏付けられた判断力、即興性、聞く力、発話力の養成が必須となる。

2 オックスフォード・ユニオンのトレーニング方法と調査手順

様々な技能が必要とされるディベートは、英語による論理・表現の訓練に最適である。しかし、それほど英語力の高くない日本の学習者に、いきなり高度な内容を要求するのは現実的ではない。世界最高峰の OU でも入学後ディベートを始める者も多いため、基礎から学べる豊富な機会が設けられている。特に *The Oxford Union Guide to Schools' Debating* には、初学者が基本から練習できるように詳細な手引きがある。

この中でディベートに必須である論理的表現の構築に SEXI 戦略が記載されている。これは State, Explain, Illustrate の文字を並べたもので、この順で議論を進めて論理的なスピーチを構築する。この手順は、英文ライティングの基本パラグラフの 3 文方式を応用したものである。日本の学習者も、この情報の流れのムーヴ (Move) でスピーチを書く練習をすると効果的と考えられる。

本論では、SEXI が実際のスピーチでどのように活用されているのか OU のディベートコーパスを作り検証した。被験者は 30 人で約 8 万ワードのコーパスを *AntConk Windows 4.2.0* を活用し分析を行った。

3 結果の示唆と考察

OU のディベートでは話者の多くが SEXI の戦略を活用し、客観性を高め議論を組み立てていることが示された。前述のように、これはパラグラフの基礎の形であり、日本の学習者も短い 3 文方式で議論を組み立てるトレーニングをしていけば、論理的な発話が身につく可能性が示唆された。初めは、トピック文⇒サポート文⇒具体例のムーヴの短いパラグラフでディベートの論旨をまとめる。やがて、次第に長いパラグラフのムーヴを構築し発話できるように指導することが有効である。また、学習者は議論の客観性を高めるための 3 つの観点を認識しディベートに取り組むことも大切である。これらの具体的手法について本発表で参加者と共有していく。

参考文献

Jonathan Bailey, J., and GEORGE Molyneaux, G. (2008) *The Oxford Union Guide to Schools' Debating*. Oxford: Oxford Union.

中谷安男 (2022) 『オックスフォード世界最強のリーダーシップ教室』中央経済社

基礎教養英語リーディングクラスにおける教科書リストの導入:
学生へのアンケート調査とインタビューを通して
Introducing a List of Textbooks for General English Reading
Classes: Based on the Results of a Survey and Interviews to Students

志村 美加、 中竹 真依子、 小杉 弥生

永田 祥子、 目黒 沙也香

(学習院大学外国語教育研究センター)

1. はじめに

学習院大学外国語教育研究センターでは、コロナ禍において段階を踏みながら英語プログラム改編に着手することになり、2021年度に少人数、習熟度別クラス編成を開始した。2022年度も授業の多くはオンラインで開講されたが、プログラム改編の第2段階として2023年度に教科書リストの導入を行うこととなった。しかし、教科書リストを導入するにあたり、参照することが可能な基礎教養英語クラスにおける教科書リストや共通教科書に関する先行研究が少ないことが明らかになった。そこで、本研究では学生に対してアンケート調査とインタビューを行い、その結果を分析することにより、より適切な教科書リストを作成するための要素を明らかにすることを目的とする。

2. 本研究への参加者と調査方法

本研究の参加者は、2022年度のリーディングクラスを必修科目として履修する1・2年生である。法学部、文学部、理学部の学生に対してWebアンケートを行い、有効回答者数は1年生1039人、2年生557人、回答率は約53%となった。なお、学生はリーディングクラスに加え、コミュニケーションクラスも履修している。

アンケートは、9月末に行い、webアンケートの形をとった。アンケートは選択肢形式と自由記述形式から構成され、本研究では教科書の難易度と教科書の内容への関心について尋ねた2項目を取り上げる。

また、インタビューは、発表者が担当するクラスの学生に学内システムを利用して協力を依頼した。最終的に1年生14名、2年生15名より調査協力の同意を得られ、年度末の3月にインタビューを実施した。

THE 16th ANNUAL CONVENTION OF JACET KANTO CHAPTER

3. アンケートとインタビューの分析結果

3.1. 教科書レベル

教科書のレベルに関しては、1年生は77.4%、2年生は71.5%が「適切なレベルだった」と回答し、1年生の17.4%、2年生の20.6%の学生が「レベルは高かったがやりがいがあった」と回答した。

インタビューの結果、少し辞書を使えば読める程度の場合にレベルが適切であると回答する学生が多いことが分かった。また、一般入試枠で入学した学生の多くは高校3年時よりも教科書の英文が易しいことを指摘した。1学期は難しいと感じていても、2学期には大学における英語の学習に慣れ、適切なレベルだと感じる学生も少なからず見られた。一方で、部活等で忙しく学習の時間が十分にとれない時にも易しい教科書を適切なレベルであると回答していることも明らかになった。

3.2. 教科書の内容への関心

教科書の内容に関心が持てたかを尋ねる項目に関しては、1年生の84%、2年生の86%が「そう思う」あるいは「とてもそう思う」と回答した。関心が持てないと回答する1年生の割合は15%、2年生が10%となった。

インタビューの結果、教養として新しい知識を得られる内容には関心を持つことができるが、既に知っていることを英文で読むことへの関心の低さに言及する学生が多かった。また、文科系の学生は特に社会問題や文化、歴史など様々なトピックの英文を読むことを好むことも明らかになった。

4. 考察

一般入試枠で入学した学生を中心に、1・2年生の双方が本来の学生のTOEICやCEFRのスコアによって選択された教科書の英文を易しいと感じる学生が多い傾向がある。当センターのように、コミュニケーションクラスで英語を話す機会を提供できる場合、リーディングクラスでは、4スキルよりも“英語で情報を探すスキル”や“専門分野を学ぶ際に役立つ読む力”の習得につながるように、学生のTOEICスコアよりも少し高いレベルの教科書を選択する必要がある。そうすることで、「やりがいがあった」と感じる学生を増やすこともできるだろう。また、「適切である」との回答がどのような理由によるのかは確認し続ける必要があるだろう。

また、教科書の内容を重視し、学生にとって新しい知識となる内容が多い教科書や、トピックの種類が多い教科書を選択し、学生が英文を読むことに対してモチベーションを失わないよう配慮することが重要となるだろう。

ChatGPT が英語教育にもたらすもの What ChatGPT Brings About in English Education

水本 篤（関西大学）

本講演では、2022年11月30日に公開されて以来、世界中で大きな反響を呼んでいる ChatGPT の英語教育への影響について深く掘り下げます。ChatGPT は、大規模言語モデルを活用し、多岐にわたる質問に回答することが可能なツールであり、それが英語教育の効果向上、教材開発の改革、さらには学術研究活動の効率化につながる可能性を秘めています。本講演では、ChatGPT が英語教育にどのような変革をもたらすか、そして教材作成や論文執筆でどのように利用できるかについての解説を行います。さらに、具体的な活用事例 (e.g., Mizumoto & Eguchi, 2023) や、現在注目されている問題点 (e.g., Kasneci et al., 2023) についても議論します。特に、ChatGPT やその他の生成型 AI を英語教育や学術研究にどのように有効に活用するかについての最新の知見を共有します。

ChatGPT に関する研究はまだ新しく、その活用法は多くの教育機関で現在も探求が続けられています。そのため、講演では参加者間での意見交換を積極的に促し、新たな視点やアイデアを共有することを奨励し、その方法を提案します。これにより、ChatGPT と英語教育の未来についての共通理解を深めることを目指します。

References

- Kasneci, E., Sessler, K., Küchemann, S., Bannert, M., Dementieva, D., Fischer, F., Gasser, U., Groh, G., Günemann, S., Hüllermeier, E., Krusche, S., Kutyniok, G., Michaeli, T., Nerdel, C., Pfeffer, J., Poquet, O., Sailer, M., Schmidt, A., Seidel, T., ... Kasneci, G. (2023). ChatGPT for good? On opportunities and challenges of large language models for education. *Learning and Individual Differences, 103*, 102274. <https://doi.org/10.1016/j.lindif.2023.102274>
- Mizumoto, A., & Eguchi, M. (2023). Exploring the potential of using an AI language model for automated essay scoring. *Research Methods in Applied Linguistics, 2*(2), 100050. <https://doi.org/10.1016/j.rmal.2023.100050>

Advising in language learning:

How reflective dialogue supports students

Jo Mynard (Kanda University of International Studies)

This presentation will explore how advising in language learning (ALL) has a vital role to play in supporting language learners. ALL is one-to-one reflective dialogue with language learners that promotes learner autonomy (Carson & Mynard, 2012; Kato & Mynard, 2016; Mynard 2020a). ALL has its origins in Europe, has been part of language education since the 1970s, and is now considered to be a distinct field alongside language teaching. The first part of the presentation will briefly summarise the theoretical underpinnings and some practical aspects of advising. We will also examine the main differences between teaching and advising.

In the second part of the presentation, we will see illustrative excerpts from advising sessions and recent research studies to see how ALL is ideal for supporting individualised language learning. ALL takes a learner's goals, interests, context, and other individual difference factors as a starting point and through a supportive dialogue, learning advisors help learners to take charge of and sustain their learning over time.

Although advising sessions vary based on the needs of the learner, the degree of familiarity, and the style of the advisor, there are some procedures that tend to lead to a successful session. In the third part of the presentation, we will see some examples of advising sessions to show how advisors can facilitate intentional reflective dialogue in learners with different characteristics by using a range of advising strategies and tools.

We will conclude by looking at how teachers can be prepared for such a role through training, mentoring and ongoing reflective practice. We will also provide suggestions for how educators can contribute to the growing field of ALL through dissemination of research and reflections on their practice.

THE 16th ANNUAL CONVENTION OF JACET KANTO CHAPTER

Bio

Jo Mynard



Jo Mynard is a Professor in the Faculty of Global Liberal Arts and Director of the Self-Access Learning Center (SALC) at Kanda University of International Studies (KUIS) in Japan where she has worked since 2008. She is also the Director of Research Institute for Learner Autonomy Education (RILAE) at KUIS. She advises language learners, and oversees day-to-day operations, research, and the general direction of the SALC. She also teaches an undergraduate course on Effective Language Learning and a graduate course on Learner Autonomy as part of the MA TESOL programme at the KUIS Graduate school. She completed her Doctorate in Education (TEFL) at the University of Exeter, UK in 2003 and her M.Phil, in Applied Linguistics at Trinity College, Dublin in 1997. She has co-edited and co-authored over 100 scholarly works, including several books on learner autonomy, advising, reflective dialogue, and social learning spaces. She has been the editor of SiSAL Journal (Studies in Self-Access Learning) since 2010.

Practical advising approaches for facilitating reflection and promoting wellbeing

Satoko Kato (Kanda University of International Studies)

Advising in language learning (ALL) aims to promote learner autonomy by facilitating reflective dialogue, which helps learners to think deeply and take ownership of their learning (Kato & Mynard, 2016; Mynard & Carson, 2012). Reflection promoted in ALL is more than just helping learners to think back and describe what happened or how they felt. It is a process of supporting learners to restructure their established assumptions and beliefs, which can lead them to transformational learning (Brockbank & McGill, 2006).

In this 90-minute workshop, the presenters break down the concept of ALL and facilitate a practical session where participants can learn how to conduct reflective dialogue by using some basic strategies (repeating, summarizing, complimenting, metaphor, powerful questions, and what-if questions). They will also use some tools for helping others to engage in reflection.

Engaging in reflective dialogue can not only facilitate autonomy in learning but it can enhance participants' (learners and advisors) sense of well-being (Davies et al., 2020; Kato, 2022; Mozzon-McPherson, 2019; Oxford, 2016, Shelton-Strong, 2020; Tassinari & Ciekanski, 2013). Well-being is a multi-dimensional construct that includes self-acceptance, positive relationships, autonomy, environmental mastery, purpose in life, and personal growth (Ryff, 1989; Seligman, 2011). In recent years, research on teachers' well-being which has a significant relationship with teachers' motivation as well as positive effects on both themselves and on their students, has been growing (Homes, 2005; Mercer & Gregerson, 2020). However, teachers/advisors usually pay attention to developing learners' well-being and not much attention is paid to promoting teacher/advisor well-being.

THE 16th ANNUAL CONVENTION OF JACET KANTO CHAPTER

This workshop will provide an opportunity to learn and try the strategies to conduct reflective dialogue and reflect on the dialogue's impact on learners' and your own professional well-being.

Bio

Satoko Kato



Satoko Kato is an Associate Professor at the Research Institute for Learner Autonomy Education (RILAE), Kanda University of International Studies (KUIS) in Japan. She is also a lecturer at the Graduate School of Language Sciences, KUIS, teaching ‘learner autonomy’ and ‘teacher autonomy’ in the MA TESOL program. She is also the chair of the JALT Mentoring and Orientation Committee. She holds a Ph.D. degree in Education from Hiroshima University and a Master’s degree in TESOL from Teachers College, Columbia University. She has conducted over 4,000 sessions as a learning advisor in the past 16 years, working on promoting learner autonomy. She is also developing and implementing advisor education programs for teachers/advisors, domestically and internationally. She co-authored “Reflective Dialogue: Advising in language learning” with Jo Mynard (Routledge NY, 2016; Japanese version issued in 2022 from Osaka University Press), and 「英語教師のための 自律学習者育成ガイドブック」 (KUIS Press) with Hisako Yamashita.

Effect of Interaction to develop 21st-century skills and cross-cultural sensitivity for Society 5.0

Hiroyuki Obari (Aoyama Gakuin University, Emeritus)

Society 5.0 demands that individuals possess a broad range of 21st-century skills and global perspectives. As English is widely recognized as the lingua franca, English learners' proficiency and cross-cultural communication abilities are essential for navigating the challenges of the modern world. This study explores the effect of interaction with eight young native English speakers on English learners' attitudes toward using English, cross-cultural sensitivity, and 21st-century skills. To prepare for Society 5.0, the author investigates students' attitudes toward speaking English, cross-cultural IQ, and the implications of regular interactions with them. During the second semester of 2022, the study focused on a range of instructional strategies designed to enhance the participants' language learning and 21st-century skills. These strategies included:

- (1) COIL (Collaborative Online International Learning) with NUS (National University of Singapore), which provided students with opportunities to engage in cross-cultural dialogue and collaboration with students from a different country.
- (2) World religious study, which introduced students to different religious traditions and helped to broaden their understanding of diverse cultural practices and beliefs.
- (3) Global leadership, which focused on developing students' leadership skills and their ability to work collaboratively in a global context.
- (4) Cross-cultural communication, which was facilitated by a foreign professor and provided students with opportunities to engage in authentic communication with native speakers of English.
- (5) Research presentations about global issues, which allowed students to apply their language and research skills to real-world issues and develop their critical thinking abilities.

These strategies were supported by the use of digital storytelling (DS) and MP4 movies, which allowed students to practice their presentation skills and receive feedback from their

THE 16th ANNUAL CONVENTION OF JACET KANTO CHAPTER

peers and the native speakers. Students received feedback from native English speakers through PeerEval software, and their presentations were filmed and uploaded to the group Line for review. English proficiency was assessed using the TOEIC pre- and post-test, and a questionnaire survey was conducted to identify significant factors affecting students' learning outcomes. After 15 weeks of treatment, participants' mean TOEIC score increased by 71 points, from 568 (SD, 115) to 639 (SD, 119), indicating improved English proficiency and presentation skills. Comparing pre- and post-questionnaire results demonstrated improvements in cross-cultural sensitivity and 21st-century abilities, with students becoming more comfortable using English and engaging in alternative worldviews. The transformation in students' perspectives of cross-cultural communication abilities, presentation skills, and alternative worldviews was a significant outcome of the 15-week treatment. The study found that most students were able to use English without anxiety, which is a notable achievement. The native speakers observed the progress of the students in their speaking and presentation skills and provided valuable feedback to support their learning of English. These findings will be discussed in detail in the study's full report and may have practical implications for language teachers and curriculum designers seeking to prepare students for the challenges of Society 5.0. The study concludes that frequent interaction with young native English speakers can significantly influence English learners' attitudes towards using English and their worldviews.

As a limitation, the study only involved a small group of 41 participants, and the results may not generalize to other settings or populations. Future studies could expand the sample size and involve a more diverse group of participants to increase the generalizability of the findings including the long-term impact of frequent interaction with native English speakers on English learners' attitudes and skills. A follow-up study could be conducted to assess whether the improvements in English proficiency, presentation skills, cross-cultural sensitivity, and 21st-century skills are sustained over time.

**第二言語語用論を加味した英語教育の提案：
検定教科書への体系的導入に向けて
Incorporating L2 Pragmatics into EFL in Japan:
A Proposal for MEXT-Authorized Textbooks**

吉富 朝子（東京外国語大学）

JACET SLA 研究会では現在、第二言語語用論をいかに日本の英語教育に体系的に取り込めるかについて検討している。研究会で実施している読書会では、実証研究の文献調査や、第二言語語用論を踏まえた英語教材および実践例などを概観してきたが、日本の英語教育において第二言語語用論が明示的・体系的に指導されていないことを再認識し、その解決に資する方法の検討を進めている。本発表ではその進捗状況について報告する。

新学習指導要領によれば、外国語教育において、「目的・場面・状況」を踏まえた言語活動が推奨されているにも関わらず、日本の英語教育の場では、目的・場面・状況ともっとも関連の深い語用論に関する指導も評価も体系的には行われていない。しかし、コミュニケーション能力を育成するにあたって、文脈を踏まえた言語運用能力を育成することは必須である。文法・語彙・発音の運用場面では、必ず語用論によって形式の選択が機能的になされることを考えれば、語用論を統合した指導および評価は避けて通れないはずであろう。

本発表では、主だったコミュニケーション能力モデルにおいて、語用論を含まない理論的枠組みは存在しないことを指摘し、コミュニケーション能力の育成を謳ったコミュニカティブ・アプローチにおいて、適切な言語使用ができるようになるための指導が掲げられているにも関わらず、外国語としての英語教育では明示的な語用論の指導がほとんどなされていないことを問題提起する。

語用論が実践的な指導の中でなかなか扱われない理由としては、以下の点が挙げられる：1) 教員養成課程において語用論の指導法がほぼ扱われていない；2) 文法規則などと比べて語用論の規則・規範は捉えにくく、価値観の押し付けになりうるという危惧がある；3) 語用論は、文法や語彙能力がある程度身につけている中級以上の英語学習者にしか指導できないのではないかとする認識がある；4) 十分

THE 16th ANNUAL CONVENTION OF JACET KANTO CHAPTER

な言語材料に触れ、使う機会さえ与えられれば、語用論は暗示的に学習されうると考える教員もいる；5) 語用論の指導は現在、主に大学英語教育、あるいは発話行為の指導に留まっている；6) 世界的に普及している英語の標準テストにおいてさえ、語用論が明示的な評価対象になっていることは稀で、語用論を指導していないがために評価対象にできない結果、テストの波及効果を期待できない。

こうした現状に対して、本発表では検定教科書に語用論を体系的に導入すること、すなわち CEFR などに準拠する形で、レベルに応じた内容を取り込むことの重要性和その実現可能性について提言したい。

検定教科書に語用論を体系的に導入することで、教員養成課程でも語用論の指導を取り上げざるをえなくなる。また、さまざまな語用論能力に貢献する知識・技能のうち、初級学習者からでも明示的に指導可能なものは具体的にどのような内容であるかを例示することができる。つまり大学教育以前の段階から、語用論の基礎を英語教育に含めることにつながり、発話行為の指導に限定されない、より広い相互交流能力(interactional competence)を育成する土台を提供できる。そうすれば、言語テストにおいても、語用論能力を評価する問題を出題しやすくなり、指導・学習への波及効果が生まれる。これらの取り組みの総合的な効果として、日本の英語学習者のコミュニケーション能力の底上げが期待できる。このような好循環を生む上で、検定教科書が果たす役割は大きい。

本発表では、実践例として、現在出版されている検定教科書を例にとって、どこでどのように語用論の指導を取り込めるか、文法・語彙・発音の指導と統合した具体案をいくつか提案したい。また言語評価において語用論をどのように扱えるか、その可能性についても具体的なテスト開発例を紹介しつつ、考察する。

THE 16th ANNUAL CONVENTION OF JACET KANTO CHAPTER

●○● 発表査読者 ●○●

Paul McBride (玉川大学)、伊藤泰子 (神田外語大学)、長田恵理 (國學院大學)、河内山晶子 (明星大学)、小屋多恵子 (法政大学)、下山幸成 (東洋学園大学)、鈴木健太郎 (北海道教育大学)、中山夏恵 (文教大学)、西川恵 (東海大学)、馬場千秋 (帝京科学大学)、藤枝豊 (共愛学園前橋国際大学)、藤尾美佐 (東洋大学)

●○● 賛助会員 LT ●○●

株式会社 mpi 松香フォニックス、コスモピア、チエル株式会社 (申込順)

●○● 支部大会運営組織 ●○●

山口高領 (大会委員長・運営委員長) : 全体統括

佐竹由帆 : 青山学院大学会場手配

伊藤泰子 : 基調講演とワークショップ関連

下山幸成 : 当日の ICT まわりの対応

辻りこ : 入金の確認や非会員への対応

8:30-13:00 まで Main Room にて、困っている方への対応 : 辻りこ、渡辺彰子

12:30-17:30 まで Main Room にて、困っている方への対応 : 田口悦男

司会者業務等担当 : 浅利庸子、大井洋子、河内山晶子、小屋多恵子、関戸冬彦、西川恵、馬場千秋

●○● Call for Papers: JACET-KANTO Journal Vol. 11 ●○●

JACET-KANTO Journal Vol. 11 (JACET 関東支部紀要 第 11 号)

■原稿締切日：2023 年 8 月 31 日 (木) 23:59 JST

■原稿分量：A4 判横書き、英文 abstract、keywords、図、文献などを合わせて計 20 枚
以内 (日・英とも)

■応募手順：

1. 支部ホームページ上の「JACET-KANTO Journal Vol. 11 Call for papers」から投稿規定を確認してください。

<http://www.jacet-kanto.org/>

2. 「Submission Form (申し込みフォームへ)」から 応募手続きを開始してください。

<https://jacet-kanto.org/journal/submission/index.html>

3. “JACET-KANTO Journal Online Submission Form” の必要事項を入力してください。

4. Form 上の “Attachment” にて、所定テンプレートによる応募原稿 (データファイル) を「オンライン提出」してください。

5. Form 上の “Submit” をクリックし、応募手続きを完了してください。

■紀要発行日：2024 年 3 月 31 日 (日) (予定)

Vol. 9 から、J-STAGE に全文 XML で掲載しています。そのため、掲載原稿は検索・引用されやすくなっています。

関東支部大会での発表に基づいた原稿も大歓迎です。皆様からのご投稿をお待ちしております。